京機短信
KEIKI short letter

No.418 2026.7.6

京機会（京都大学機械系同窓会）　tel. & fax. 075-383-3713
E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp
URL: https://keikikai.jp
編集責任者　京機短信編集委員会

目次

・2026年度九州支部春の行事開催のご報告……西　猛（pp. 2 – 5）
・日本のやまとごころの源流を訪ねて……千々木亨（pp. 6 – 12）
・関東支部写真同好会　第28回撮影会の報告……山下真司（pp. 13 – 15）
・学生と先輩との交流会……松久　寛（pp. 16 – 20）
・大東研究室同窓会のご報告……冨田栄二（p. 21）
・京岬会（機械科、昭和33年卒）開催報告……岸本秀弘（p. 22）



京都鉄道博物館　扇形車庫と転車台　2025年11月8日撮影

2026年度九州支部春の行事開催のご報告
～失われた『豊（とよ）の国』を再発見！～

西　猛（H7/1995卒）

本年の九州支部春の行事は、「失われた『豊の国』を再発見！」をテーマとして、大分県北部の中津・宇佐・耶馬渓および国東半島を巡る1泊2日の行程で、総勢15名で開催しました。本地域はかつて「豊（とよ）の国」といわれ、神仏習合を始めとする日本の精神的な基盤が形成された地と言われており、古代から近代に至る日本の文化の源流を辿り、現代における我々自身の価値観や行動原理を見つめ直す「知的冒険」として位置づけて企画したものです。点在する歴史資源を単独で理解するのではなく、それらを有機的に結びつけることで、日本人の根底にある思考様式を再認識することを目的といたしました。

【1日目】

初日は小倉駅に集合した後、レンタカーに分乗して移動し、道の駅「豊前おこしかけ」（福岡県豊前市）にて昼食をいただきました。当地は神功皇后の伝承を有する場所であり、行事の導入としてふさわしい歴史的背景を感じることができました。その後、中津駅での参加者合流を経て宇佐方面へ移動しました。

まず訪問した双葉の里では、当地出身の昭和の大横綱「双葉山」の足跡を辿り、その生き方から「不屈の精神」という日本人の特質について改めて考える機会となりました。双葉の里から、宇佐市内ののどかな田園風景を進みます。この地にはかつて海軍航空隊基地があり、終戦間際には多くの若い方が特攻隊として旅立ったといわれています。かつての滑走路が田んぼの真ん中を通っており、道路の周りには掩体壕（戦闘機の格納庫）も現存し、トラクターの格納庫として活躍しています。続いて訪れた宇佐神宮では、全国四万社と言われる八幡様の総本宮としての歴史とともに、神仏習合という異なる価値観を調和させる日本固有の文化を体感いたしました。珍しい参拝作法である「二礼四拍手一礼」（この作法は、宇佐神宮のほかには、出雲大社（島根県）、彌彦神社（新潟県）の3社だけです）も含め、他地域とは異なる独自性を実感する場となりました。参拝途中、参加者の藤川さん（S42/1967卒）のご提案により、宇佐神宮のメイン参拝ルートから少し離れた大尾神社も訪れました。ここは、かつて和気清麻呂が八幡大神からの御神

託を受け、道鏡の野望を打ち砕いた場所として知られています。途中の険しい山道は宇佐神宮の参拝とはかなり異なる物でしたが、神社にたどり着いた瞬間の厳かな雰囲気が印象的でした。

夕刻には中津市内にて懇親会を開催いたしました。名物「鱧（はも）」を始めとする地元の海の幸・山の幸を味わいながら、「豊の国」という視点で歴史・文化・個人の生き方など多岐にわたる議論が自然発生的に行われ、参加者相互の理解と親睦が大きく深まる有意義な時間となりました。懇親会会場の店先では、お店所有のオート三輪（ダイハツ・ミゼット）を発見。ここは乗り物好きの機械屋の集まりらしく、店の方に現在の使われ方など詳細なヒアリングが始まりました。また、この懇親会では、千々木さん（S54/1979卒）より、この地域の歴史に関する深い造詣がご披露されました。この話があまりにも素晴らしく、このままにしておくのは惜しいというご意見多数でしたので、近日中に京機短信でご披露いただくことになりました。（乞うご期待！）

【2日目】

2日目は参加者の関心に応じて2つのコースに分かれて実施しました。

中津・耶馬渓コースでは、福沢諭吉旧居および中津城を訪れ、近代日本における思想的転換点と「独立自尊」の理念の背景について理解を深めました。その後、青の洞門および一目八景を巡り、自然と人間の営みが長い年月をかけて形成した景観を体感するとともに、特に青の洞門は、菊池寛の小説「恩讐の彼方に」で描かれたように、禅海和尚が30年以上を費やして掘削したものであり、不屈の精神の象徴として初日の学びと重ねて理解することができたと同時に、禅海和尚が托鉢で資金を集め、一緒に掘削してくれる仲間を雇ったり、完成後は通行料を徴収したり（日本初の有料道路）と、意外にビジネスマンだったことを知り、新しい発見を得ました。と同時に、現在日本で課題とされる「レジリエントな社会」についても考えさせられるものでした。

一方、国東半島コースでは、熊野磨崖仏や両子寺を訪問し、神仏習合文化が地域にどのように根付いているかを実感いたしました。加えて、昭和の町では高度経済成長期の日本の活気を再現した街並みを散策し、現代との対比の中で日本社会の変遷を考える機会となりました。

【まとめ】

今回の行事は、九州支部事務局長を拝命した私がこの地域出身だから、という

軽い気持ちから始まった企画でしたが、改めて我が故郷とその歴史について学び、ひいては日本人について考えることにもつながる良い機会となりました。

本行事を通じて、「和の源流（宇佐）」「不屈の魂（双葉）」「自由の胎動（中津）」という3つの視点が有機的に結びつき、日本人の価値観がどのように形成されてきたのかを立体的に理解することができました。それぞれの訪問地が単なる観光地としてではなく、思想や文化の蓄積された場として再認識された点に本行事の意義があったと考えております。

また、懇親会を含めた参加者同士の交流を通じて、多様な世代・バックグラウンドを持つ会員同士が率直に意見交換を行うことができ、今後の九州支部活動においても大変有意義な基盤となる機会となりました。

九州支部では今後も、会員相互の交流の深化とともに、知的好奇心を刺激する魅力ある行事を企画してまいります。他支部からの参加も歓迎しておりますので、今後ともご支援・ご参加を賜りますようお願い申し上げます。



写真1: 昭和の大横綱「双葉山」



写真2: 宇佐神宮参拝



写真3: 懇親会の様子（中津市内）



写真4: 中津で発見した懐かしのオート三輪



写真5: 青の洞門　禅海和尚像前にて（中津・耶馬渓コース）



写真6: 熊野磨崖仏にて（国東半島コース）

日本のやまとごころの源流を訪ねて
～九州の旅　豊の国　宇佐八幡神宮（前編）*

九州支部　千々木亨（S54/1979卒）

1. 日本人らしさの原点「やまとごころ」

日本人は、世界の他の文明圏の人たちには見られない独自のものの感じ方、思考プロセスを持っている。日本人はあまり意識していないのだが、異文化の世界から訪れた人々はそのすばらしさに気づきその一面を世界に紹介した。小泉八雲をはじめ日本人的思考のおもしろさを取り上げた知識人も多く存在する。

機械技術者的に表現するなら、日本独特の自然環境と歴史の変遷をとおし、日本人は人間として生きる上での独自のOS（オペレーティングシステム）を獲得して自らの心にインストールし、子々孫々に脈々と受け継いで来たと言える。

それは、神との契約に束縛されるような西洋的な思想や、極楽往生で来世の幸せを願う仏教思想とも異なる。なにより、宗教とか哲学、道徳といった体系で整理されない。

自然の力を怖れ敬い感謝し、人との和、自然との和を大切に生きる日本人の心の在り様そのものである。ここでは「やまとごころ」と呼ぼう。西洋人には「日本人は宗教を持たない」と見えるのだろうが、日本人から見ると、「西洋人は宗教という概念にしがみつかなければ人間の基本OSを獲得出来ないかわいそうな人たち」に見える。

では、その日本人の「やまとごころ」の源流はどこにあるのか？

ロボットやAIが発達し、人間の知能を超えるヒューマノイドロボットが登場しようとしている今、めざすべきは人間の本質を体得した真に人間らしいヒューマノイドロボットであるのだが、それを実現する上で日本人の基本OSである「やまとごころ」の源流への理解を深めておくことは極めて意義深い。

われら京機会九州支部のイベントのテーマを思案する中で、大分県出身のN氏か

* 短信編集委員会より：紙幅の都合により、今月号では前半を掲載させていただきます。後半は次号にてお届けいたします。

ら、「やまとごころの源流は九州の豊の国（豊前・豊後の国の古代国家）にあり、神仏習合の原点である宇佐神宮とその周辺の遺跡群にその秘密が隠されているのではないか」という話が飛び出した。このような大胆な意見に対して誰も反対しないのが京機会メンバーのいい所である。

さっそく京都大学の「まず、自らの目と心で確かめよ」という教えに従い、九州支部の春のイベントで現地訪問を敢行することとなった。

2. やまとごころと古代九州豊の国

日本書紀や古事記によると日本の歴史は神代の時代に九州からはじまったとされる。

人間味あふれる神様とその末裔たちが、大冒険とロマンスを繰り広げながら日本という国をまとめ国家の形に造りあげてゆく。九州はその古代の壮絶な物語の重要な舞台となっている。

その物語のひとつひとつが史実かどうかという検証は歴史学者たちに任せるとして、古代九州の歴史の中で、やまとごころがどのように育まれたのか、素人なりに迫るのが今回の課題だ。

九州には古代人の想いを彷彿とさせる素晴らしい自然や、いにしえの教えを今に伝える遺跡が数多く残っている。九州では時空を飛び越えるイマジネーションという心の翼を少しはばたかせるだけで、いにしえの世界や神々の世界への時間旅行を自由に楽しむことが出来る。

京都で学生時代を過ごすと、そんな心の翼の使い方をどこかで体得しているものなのだろう、

今回のイベントに集結した仲間は、しっかり時間旅行を堪能し歴史談義で話が盛り上がった。

豊の国の歴史の足跡を現地で確認するという当面の目標は達成出来たのであるが、参加者には古代九州についての知識があまりに少なく、歴史的考察と単なる空想がごちゃごちゃになってしまう。参加者の懇親会の席上で小職が酔った勢いで聞きかじりの言い伝え話を披露していると、参加者から「言いっぱなしではな

く一度エッセイにまとめてみろ！」という厳しいご指摘を頂いた。そこで、これを契機に豊の国の歴史の謎に迫り、やまとごころの源流の手がかりを探してみることにした。すると、それらしきキーワードが見つかったので報告する。

3. 豊の国の歴史の謎

古代九州にはかつては豊の国、筑紫、日向、火の国の4つの国が存在したと言われている。豊の国は宇佐地域を中心として大分県から福岡県東部の北九州に位置し、神代の時代から栄えて来た。豊の国には多くの史跡や古文書が残されているが、その歴史にはたくさんの謎めいた物語がある。その中の代表的な3つの物語をご紹介する。

（1）豊の国の神代の時代の謎の王朝　ウガヤフキアエズ王朝の物語
（2）神功皇后の新羅征伐物語
（3）宇佐八幡宮ご神託事件と和気清麻呂の物語
（古代日本最大の皇位継承の危機）

これらの時代の歴史の多くは天皇家に関わるものであり、明治以降終戦までの間に天皇中央集権国家を盤石なものにしようとする日本政府と軍部が古代天皇を神格化し歪曲化した歴史を紛れ込ませてしまった。そこで、それらを排除して文献考証と史跡調査の科学的アプローチで日本の古代史を見直そうとした戦後の研究者を豊の国の歴史案内人に選び、彼らが提供する情報を参考にすることとした。

＜（1）の物語＞　藤芳義男氏（ふじよしよしお　1905年～1984年）

東京帝国大学工学部土木工学科卒。内務省、建設省で勤務後、熊本大学工学部教授として教鞭をとり阿蘇・熊本平野の水資源研究に尽力した。大分県臼杵磨崖仏（うすきまがいぶつ）保存修復では、崖背後の地層の湧水排出する乾燥工法を提案し文化財保護に貢献した。

考古学や古代史にも強い関心を持ち古代日本の巨石文化や神代文字に関する著書多数。

理系のアプローチ（土木・水理学）で文化財の物理的な保護に貢献しつつ、自らも古代巨石史跡や神代文字の謎に挑んだという、非常にユニークな経歴を持つ研

究者。

＜（1）の物語＞藤島寛高氏　（ふじしまひろたか　1957年～）

九州大学法学部卒　株式会社Jプロモーション代表取締役

大分県竹田市出身（ご先祖は臼杵の住職）ウエツフミ研究者

ウエツフミの研究 - ウガヤフキアエズ王朝実在論　サイト運営者

偽書とされたウエツフミを新たな角度から見直そうと情報を収集している。

＜（2）の物語＞　岡本堅次氏（おかもとけんじ　1907年～1990年？）

東京帝国大学文学部卒。北京大学、山梨大学、国士舘大学で教授として教鞭をとる。

日本古代史に関する論文多数。日本書紀、古事記、朝鮮半島の史書を言い伝えを含め徹底的に読み込み史実と伝聞を客観的に切り分けてゆくアプローチが評価される。

＜（3）の物語＞　平野邦雄氏（ひらのくにお　1923年～2014年）

東京帝国大学文学部卒。九州工業大学教授として教鞭をとる傍ら、大宰府や鴻臚館跡等九州の古代史跡調査を指揮した。徹底した文献考証による日本古代史へのアプローチが有名。

ながらく豊の国である北九州に居住し、現地に密着した調査で古代の真相に迫った。

（1）神代の時代の謎の王朝　ウガヤフキアエズ王朝の物語

豊の国の旧家（大友家（守護大名の家系）、宗像家（宗像神社創建に関わる家系））に伝わる上記（ウエツフミ）という歴史書に、謎のウガヤフキアエズ王朝の物語が記述されている。本書は神代文字のひとつのウエツフミ文字（もじ）＜豊国文字とも呼ばれる＞で書かれている。

小職はウエツフミをまだ読み解けていないのでウエツフミ研究者の藤島氏の記述を引用する。

藤島氏によると、ウガヤフキアエズ王朝は神武天皇以前に大分地域を中心に栄えた王朝で少なくとも74代続いた。神武天皇即位が紀元前660年とされているの

で、それより前のお話である。

天文学、暦学、医学、農業・漁業・冶金等の産業技術が発達していた。和を尊び、戦いではなく先進的な技術を広めることで全国を統治し、各国ごとにタケルと呼ばれる領主を任命していた。神代の時代の記述は日本書紀や古事記とほぼ同じだが、古事記などには出てこない天の星になった神々も登場し、天体の運行に関わる記述もある。その勢力範囲は、遠く中国大陸や朝鮮半島にまで及んでいたという。

ちなみに、日本書紀や古事記ではウガヤフキアエズノミコトは神武天皇の父の名前で、日向の国の生まれである。出産の為の産屋（ウガヤ）の屋根の葺き上げが終わらないうちに丈夫に生まれて来た御子なので、安産の神様として崇められている。日本製鉄八幡製鉄所の高見神社に祀られている神様の一柱でもある。ウエツフミではウガヤフキアエズは王朝の名前として登場し、神武天皇はその72代ということになっている。



ウガヤフキアエズノミコト等
九州の神々を祀る
日本製鉄㈱八幡製鉄所高見神社

門外不出であったウエツフミは江戸時代後期に発見され解読された。残念ながら文法や語彙、言語体系の面で疑義があり、歴史学的には偽書であると整理されている。

しかしながら全く創作と断ずるにはあまりにも謎が多い。

（謎その1）　作り話なら、だれが、何のために創作したのか。

現在ウエツフミは写本（大谷本、宗像本、春藤本）しか残っていないが、大友本が48冊、宗像本が41冊と、いずれも大作の歴史物語であり、国の生い立ちに関わる様々な分野に言及している。創作するにしても相当の見識を持って体系立て、著作に一生涯かけねば完成しない。

（謎その2）　なぜ、わざわざウエツフミ文字のような特殊な文字で書いたのか？

ウエツフミ文字は西暦500年頃には成立した神代文字である。藤芳氏の説明では、12世紀末に編纂された時に集められた古文書には神宮文字や岩戸文字という古い神代文字で書かれたものも含まれていたが、編者の大友能直氏がウエツフミ文字への変換表を入手し解読に成功したそうである。それにしても、当時、既に漢

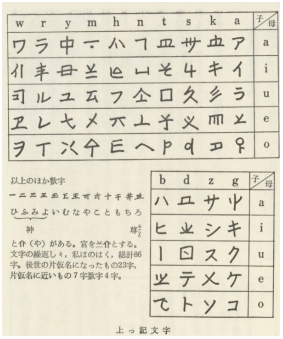
字もひらがなも一般に普及していたにも関わらず､敢えてウエツフミ文字で編集したのは何故だろうか｡単に神秘性を持たせるだけが理由であったのだろうか？

（小職の推察）

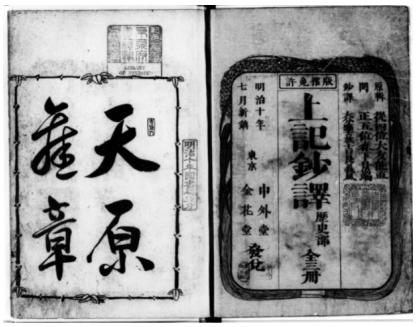
小職は大和王朝へ豊の国（ウガヤフキアエズ王朝？？）が服従してゆく過程で、敗者の歴史として葬り去られたそうになった豊の国の歴史（もしくは果たせなかった国造りへの想い）の記録を残すためにこの歴史書を編纂したのではないかと推察する。ウエツフミには大分地区の金銀鉱山などの情報も含まれており、大分の守護大名となった大友能直氏がそれに気づき、偽書として焼却されかけた豊の国の歴史の古文書をかき集め編集したという説もある。

天皇家の元来の歴史を否定する記述があり誤解されやすいこと、金銀鉱山等の重要情報が含まれていることから、あえて解読困難な豊国文字で編纂した可能性はある。膨大な書籍なので書写される過程で一部内容が修正されたり、文法や語彙、言語整合がとれない部分があっても不思議ではない。

ウエツフミ文字をはじめ神代文字については　藤芳義男著「神代文字の謎 : 古代史の空白に迫る（桃源社）」(1979)に詳しく説明されている。古代日本には漢字が伝わるずっと前から神代文字で書かれた文献が数多くあったそうだ。ウエツフミ編纂の経緯も紹介されている。　ウエツフミの大谷本と宗像本を校合したものが国会図書館にありデジタルアーカイブで抄訳本をインターネット上から閲覧出来る。大谷写本の原本は大分県立図書館に所蔵されている。



ウエツフミ文字
藤芳著「神代文字の謎」より



ウエツフミ抄訳（国会図書館蔵）

（2）神功皇后の新羅征伐物語

日本武尊の息子の仲哀天皇とその妻神功皇后が、火の国の熊襲の反乱を鎮圧に九州を訪れた時のお話。大和から移動して香椎にたどり着いた時、神功皇后が「熊襲は貧しく何も持たないので、金銀を沢山保有する海の向こうの新羅を攻めよ。」

とのご神託を得た。

にも関わらず、仲哀天皇は海の向こうにある新羅の存在を信じず熊襲と闘い、あっけなく急死した。当時、応神天皇をみごもっていた神功皇后は、石を腰に巻き付けて出産を我慢しながら海を渡り新羅を征伐した。岡本氏は朝鮮半島の記録を合わせて検証し紀元320年ごろの出来事と推定している（日本書紀では西暦200年）。新羅で勝利し日本に戻って応神天皇を産んだ神功皇后は大和へ戻り、仲哀天皇のもう一人の妃との間の子供（忍熊王）と明石海峡付近で対決して撃破する。この一連の事変の後、神功皇后は古代のスーパーウーマンとして神格化されてゆく。宇佐神宮には応神天皇と共に神功皇后も祀られている。

（謎その1）

出産とは我慢できるのか？生まれた子は本当に仲哀天皇の子か・・



神功皇后

歴史検証が正しければ仲哀天皇が死亡し、新羅征伐が終わって応神天皇が生まれるまで1年以上かかっていることになる。出産とはそんなに我慢できるものだろうか？　応神天皇は第15代天皇であり、もし、父親が仲哀天皇でなければ､現在の天皇が第126代というのは誤りということになる。皇統の継続性が危うくなるお話である。それどころか、神功皇后は仲哀天皇の皇統の血筋を引く残りの皇子を殺戮しており、天皇家に対してクーデターを起こしたことになる。

（謎その2）　仲哀天皇はなぜ、神功皇后のご神託を信じなかったのか。

岡本氏の調査では､日本が朝鮮半島への派兵は神功皇后以前にもあったはずで、天皇である仲哀天皇が海の向こうの朝鮮半島の国の存在を知らなかったとは考えがたいとのこと。その後も新羅征伐は何度も行われているそうである。

（小職の推測）

神功皇后の新羅征伐は、応神天皇の権威付けもあって、後世に英雄物語に脚色されている可能性がある。仲哀天皇は間抜け役を押し付けられ、いい迷惑かもしれない。

（編集委員会より：次号に続きます）

関東支部写真同好会　第28回撮影会（2026年5月30日）の報告

山下真司（S63/1988卒）

春の写真同好会は、5月30日（土）にさいたま市の鉄道博物館にて参加者6名で撮影会を開催しました。

蒸気機関車、各種特急列車、歴代新幹線など多くの車両が展示されており、日本の鉄道史のいろいろな面の撮影を楽しみました。

また屋上のデッキから、現在走行中の新幹線も撮影することができました。

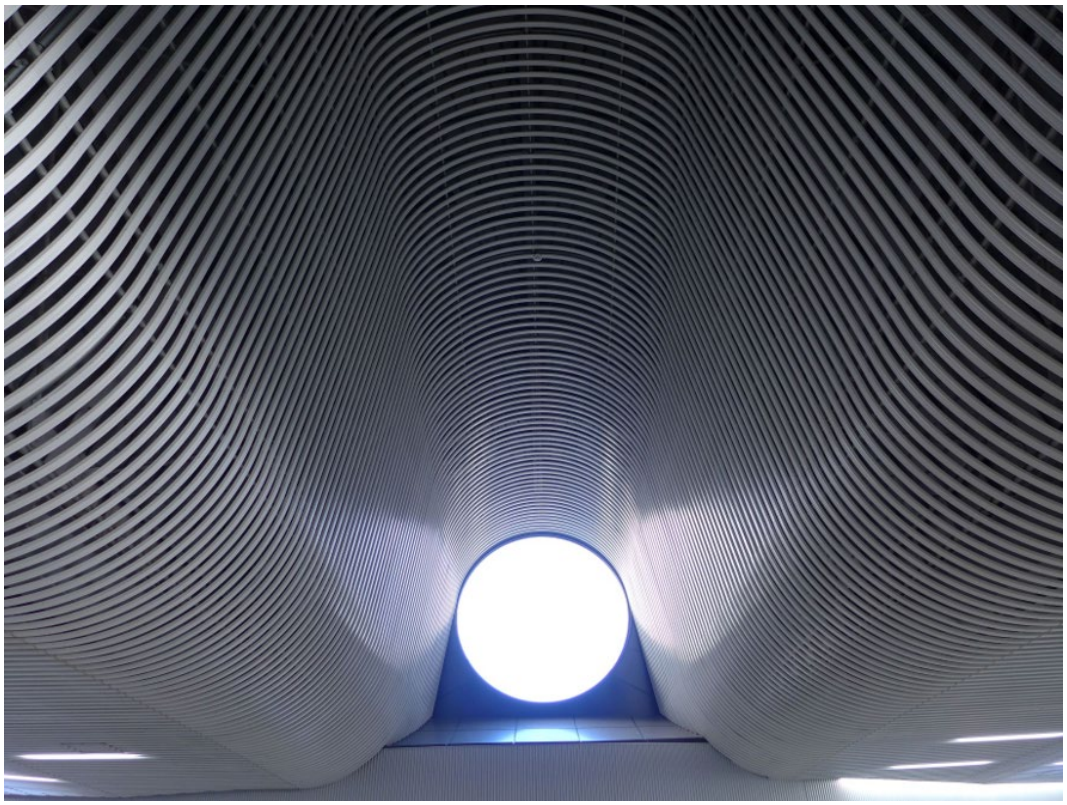




作品の一部を紹介いたします。



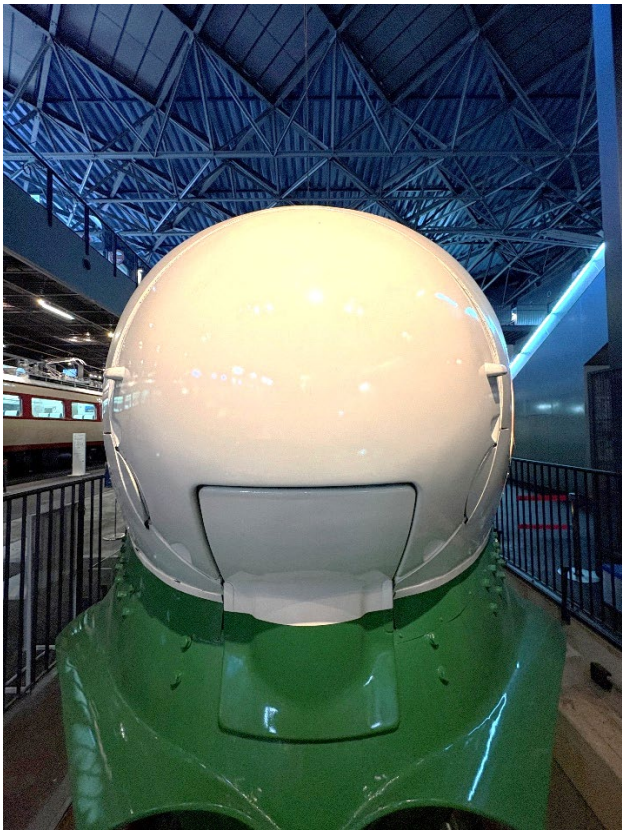
「C57機関車」　増本雄治さん（S48）



「奇妙な天井」　秋園純一さん（S50）



「整列」　山下真司さん（S63）



石川直明さん（H2）

その他の作品も紹介しておりますので、写真同好会報告ページもご覧ください。

https://keikikai.jp/9317/

学生と先輩との交流会

松久　寛（S45/1970卒）

1997年に機械教室の100周年記念事業があり、それを機に京機会の再生プランもつくられた。すなわち、会長などの組織体制をつくり、ニュースを発行し、会費も年3,000円とされた。しかし、総会の参加者は相変わらず、高齢者が主であり、懇親会も寂しかった。そこで、1999年の春季大会・総会の付随行事として、総会の前に「学生と先輩との交流会」を開催した。狙いは、この交流会に企業の若手と学生を集め、彼らに総会と交流会に参加してもらおうというものである。なお、交流会の参加費は無料であり、若手社員は会社の出張で京機会に参加し、学生は企業の実情を知ることができ、京機会も総会の参加者が増えるという一石三鳥の企画である。場所は吉田の機械系教室の玄関ホールで34社（1省庁含）から卒業生60名が参加し、総会は146名、懇親会は81名の参加となり、初めて若い人の参加する懇親会となった。



学生と先輩との交流会のひとこま

年々、参加企業は増加し、2001年には59社（2省庁含）となり、会場は玄関ホールだけでは足りず、教室や廊下まで使用し、懇親会場を京大会館から吉田の生協食堂へ移した。交流会には300名以上、総会には卒業生199名、学生49名が参加した。生協食堂ということで、懇親会参加費をこれまでの6,000円から2,000円（学生は500円）と低価格にしたのもあり、懇親会には200名以上が参加した。



2001年 交流会と総会懇親会

2003年に京機会学生会（SMILE）が誕生した。なお、この年には学生フォーミュラ大会に参戦するKART（Kyoto University Racing Team）も誕生した。そこで、2004年秋季大会・総会から交流会をSMILEが運営することになった。この年には懇親会参加者が284名となり、生協食堂が芋の子を洗うがごとくになった。



初代SMILEのメンバー（前列中央が会長の吉冨 聡さん）



2004年 交流会と総会懇親会

2005年から、対面ブースでの面談だけではなく、企業活動の一般論を論じるパネルディスカッションも併設した（2009年まで続いた）。また、この年から一社　5万円の参加費を徴収することにした。95社が参加したので、500万円近くの収入となり、京機会の財政が安定した。2006年にはこれまでの最大である118社が参加した。2007年には懇親会場を時計台ホールに移した。2009年に総会も時計台で開催した。



2007年 パネルディスカッション



2010年 パネルディスカッション

2010年から交流会を総会と別日程で開催することになった。これにより、交流会を長時間開催することができるようになった。しかし、京機会の多くの先輩と交流するということは薄れていった。



2010年 交流会（百周年記念館）

2011年に機械系教室が桂に移転した。2013年秋には交流会を初めて桂キャンパスで開催した。ブース交流会は船井哲良記念講堂、懇親会はカフェアルテ・カフェテリアセレネで開催した。市内から少し離れているため市内への送迎バスも手配した。新しい環境（会場）であったため運営と準備に大変苦心した年だった。



2013年 交流会（桂キャンパス・船井哲良記念講堂）

2015年からは交流会を秋から春開催とし､会場を京都リサーチパークに移した。これにより、これまで会場の設営を概ね自分たちでしていたのが、業者がしてくれる部分が多くなり、手間が省ける分、費用もかかることになった。



2015年 交流会（京都リサーチパーク）

2016年に参加費は6万円、2020年に7万円、2024年には10万円に値上げをした。2021年と2022年はコロナ禍のため、オンライン開催とした。2023年に対面開催を再開し、今年（2026年）の交流会は6月6日に開催した。なお、参加企業は2006年の118社をピークに徐々に減少しており、2026年には65社（2省庁含）となった。

交流会は京大電気系教室や東北大学機械系教室などにも取り入れられ、意義のある活動である。また、京機会の大きな財源であり、これなくしては、京機会の現在の活動は支えられない。しかし、下記のいくつかの問題を含んでいる。

①交流会は教育の一環であるか。
②企業ブースを訪れるだけではなく、就職の意義などについての講演などが必要である。
③交流会が総会などと別日程であるために、教員や幅広い先輩との交流ができない。
④採用活動が前倒しと多様化しており、交流会の存在意義が薄れている。
⑤学生が訪れるのは有名な企業のブースだけであり、無名な企業にはいかない。そのために、参加を取りやめる企業が多くある。
⑥10万円の参加費は同窓会活動にふさわしいか。
⑦交流会の準備が学生会と事務局に集中している。

ここで、交流会の在り方についての議論が必要である。さもないと、「京機会は商売が上手ですね」という評判になっていく。

大東研究室同窓会のご報告

大東研究室同窓会幹事　冨田栄二（S54/1979卒）

2026年5月30日（土）に都ホテル京都八条にて大東研同窓会が開催されました。大東俊一先生は、1962年4月から1979年3月まで内燃機関研究室を教授として主宰され、2000年6月に逝去されました。最後の卒業生は古希を迎えました。しかし、本同窓会は大東先生の退官後のみならず、ご逝去後もずっと続いています。

コロナ禍以前はほぼ2年に一回の割合で春に開催していました。2023年秋に再開したあと、2024年秋、そして今回の2026年春の開催となり、今後は毎年開催となりそうです。コロナ禍以後は25名程度が参加しておりましたが、今回は少し減って18名の参加となりました。皆さん高齢なので、いつも、同窓生の訃報のお知らせから会が始まります。最高齢の芥川正博さん（S38/1963卒）による乾杯の発声で宴会が始まりました。皆さんから在学当時のエピソードなどをご紹介していただき、大東先生に関係する感慨深い思い出を共有することができました。

現在、同窓会は幹事5名体制で運営しており、京機会事務局には名簿整理等に関してご協力いただいております。同窓会案内が届いていない方がおられたら、京機会事務局あるいは幹事までご連絡いただければ幸いです。



京岬会（機械科、昭和33年卒）開催報告

岸本秀弘（S33/1958卒）

令和8年（2026年）6月1日（月）に彦根市で開催した。参加者は梅本　毅、小澤三敏、岸本秀弘、倉田武彦、造田恵市、新田敏夫の6名。中華料理を楽しみながら近況報告を交えて賑やかに歓談した。梅本君の司会のもと大いに盛り上がった。次いで2次会になり、久しぶりのハイボールで続きの歓談をした。90歳になったが皆元気だった。（岸本秀弘記）

❦❦❦